

2020年7月7日

各位

公益財団法人 大同生命国際文化基金
理事長 北原 睦朗

2020年度（第35回）大同生命地域研究賞

受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：北原睦朗）
では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。

受賞者および、賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：2020年7月22日（水） 14：00～

場所：一般社団法人 『クラブ関西』

大阪市北区堂島浜1丁目3-11 TEL：06（6341）5031

2. 受賞者

1）大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

○日越大学 学長

古田 元夫 氏

2）大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

○筑波大学 人文社会系 准教授

塩谷 哲史 氏

○国立民族学博物館 グローバル現象研究部 准教授

鈴木 英明 氏

○神戸女学院大学 文学部英文学科 准教授

南出 和余 氏

3）大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

○該当者なし

以上

お問合せ先：公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局（阪東） TEL: 06(6447)6357

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためにいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア（ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域）。

3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

4. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。2020年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

早稲田大学人間科学学術院 教授	井上 真 氏
国立民族学博物館 名誉教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部 教授・同大学図書館 館長	臼杵 陽 氏
独立行政法人日本学術振興会 監事	小長谷 有紀 氏
京都大学大学院文学研究科 教授	松田 素二 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2020年度
大同生命地域研究賞 受賞者

◆大同生命地域研究賞（1名）

「ベトナム・東南アジアにおける普遍的要因を重視した地域研究」

○日越大学 学長

ふるた もとお
古田 元夫 氏

◆大同生命地域研究奨励賞（3名）

「中央アジアにおける水利と社会に関する歴史学的地域研究」

○筑波大学 人文社会系 准教授

しおや あきふみ
塩谷 哲史 氏

「インド洋西海域世界における移動性の総合的・動態的研究」

○国立民族学博物館 グローバル現象研究部 准教授

すずき ひであき
鈴木 英明 氏

「バングラデシュにおける次世代から見た社会変動の研究」

○神戸女学院大学 文学部英文学科 准教授

みなみで かずよ
南出 和余 氏

◆大同生命地域研究特別賞（1名）

○該当者なし

2 0 2 0 年度
大同生命地域研究賞

古田 元夫 氏

日越大学 学長

略 歴

古田 元夫（ふるた もとお）

1. 現 職：日越大学 学長

2. 最 終 学 歴：東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1978 年）

3. 主 要 職 歴：1978 年 東京大学教養学部助手
1983 年 東京大学教養学部助教授
1995 年 東京大学教養学部教授
1996 年 東京大学大学院総合文化研究科教授
2001 年 東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長
2004 年 東京大学副学長
2005 年 東京大学理事・副学長
2009 年 東京大学附属図書館長
2015 年 東京大学退職、同名誉教授
2016 年 日越大学学長
現在に至る

4. 主な著書・論文：

- ①『東南アジアの歴史』（編著）2018 年、放送大学教材
- ②『ベトナムの基礎知識』2017 年、めこん
- ③『ドイモイの誕生』2009 年、青木書店
- ④『ホー・チ・ミン』1996 年、岩波書店
- ⑤『ベトナムの世界史』1995 年、東京大学出版会（2015 年増補新装版）
- ⑥ *Nạn Đói Năm 1945 Ở Việt Nam*, (đồng chủ biên với Vă n Tạo), Viện Sử học VN, 1995（『ベトナムにおける 1945 年飢饉』ヴァン・タオ氏と共編、ベトナム語、1995）
- ⑦『歴史としてのベトナム戦争』1991 年、大月書店
- ⑧『ベトナム人共産主義者の民族政策史』1991 年、大月書店

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：1990 年 学術博士（東京大学）

業績紹介

「ベトナム・東南アジアにおける普遍的要因を重視した地域研究」に対して

古田元夫氏は、ベトナム語を本格的に駆使する第一世代の研究者として、1970年代以降、日本におけるベトナム現代史研究さらにはベトナムを中心とした東南アジア地域研究を先導してきた。

古田氏の研究の特色は、ベトナムを中心的な対象としながらも、絶えず、インドシナ、東南アジア、中国などの周辺地域との相互作用、さらにはグローバルなコンテキストの中に位置づけることによって結論を導くという点にある。この特色はまた、地域研究が一つの新しい学問分野として、細分化された既存の諸分野と対等な地位を獲得していく歩みとも重なっている。地域研究は、今日でこそ学問分野の一つとして公認されるようになっているが、その背景には同氏に代表されるような世代のたゆまぬ貢献があったといっても過言ではない。

古田氏がベトナム研究の道に入った1970年代は、冷戦という状況の下、日本とベトナムの学術交流は大きく制限されており、国費や外部資金による在外研究はもちろん、留学制度も無かった。そんな時代に同氏はハノイにある貿易大学の日本語教員として滞在するかたわら、日本では入手不可能だったベトナム語の文献資料の収集に努めると同時に、ファン・フイ・レ氏やヴァン・タオ氏など後にベトナムの歴史学界の重鎮となる研究者たちとの接点を築いた。そうした人的ネットワークこそが、日越間の学術交流の基盤となったのである。

1980年代末から1990年代にかけて、ベトナムは次第に対外的な門戸を開くようになり、それに伴い学術交流の幅も拡大していった。しかし、イデオロギー的な束縛はまだ強く、研究テーマも限られていたばかりでなく、結論ありきという研究スタイルにとどまっていた。現地での調査研究にあたっては、テーマの選定からアプローチに至るまで、十分に説明して理解を得る必要があった。そうした学術環境の中、特筆に値するのは、ヴァン・タオ氏（ベトナム社会科学委員会歴史研究所長）との共同研究として展開された、ベトナム北部における飢饉(1945年)の実態調査である。このテーマは、古田氏のライフワークの一つともいえるべき日越関係史の一環であるとともに、現地調査によって丹念にデータを収集し、そこから結論を導き出すという実証的なアプローチに依拠しており、当時のベトナムにとっては画期的であった。その成果は、1995年にベトナム語の共著として出版され (*Nan doi nam 1945 o Viet Nam: Nhung chung tich lich su*, Ha Noi: Vien Su Hoc, 1995) にまとめられている。同書などの

成果により、2012年には「ベトナム社会主義共和国科学技術国家賞」を受賞した。同氏によって培われた実証的なアプローチが、ベトナムの歴史研究に対して大きなインパクトを与えてきたことの証左である。

さらに、1990年代になると、古田氏の研究の頂点に位置づけられる『ベトナム人共産主義者の民族政策史』（1991年、大月書店）、そしてそのスピン・オフともいえるべき『ベトナムの世界史』（1995年、東京大学出版会）の刊行が特筆される。いずれもタイトルからはベトナムに特化した業績であるかのような印象を与えるものの、実際にこれらの業績を貫いているのは、インドシナ・東南アジア・中国などのベトナムにとっての周辺世界や世界全体との相互作用を通じて、ベトナムの特質をダイナミックに浮かび上がらせようとするコンセプトである。換言すれば、ベトナムを取り巻く普遍的な要素に着目しながら、ベトナム自体を掘り下げていくという研究スタイルである。それは、対象地域を異にした地域研究者との共同研究のみならず、他の学問分野の研究者との学際研究を可能にするスタイルでもあった。これらの業績はいずれもベトナム語に翻訳されて出版されており、研究成果の現地への還元という点で重要であるばかりでなく、前述した実証的な歴史研究に加えて、地域研究という領域を優れた成果を通じてベトナムに紹介することにもなった。

2000年以降、古田氏の研究テーマは日越関係のほか、ベトナム戦争、ドイモイ（『ドイモイの誕生』2009年、青木書店）、地域統合などに及んでいるが、これは上記2つの業績に立脚した「各論」の発展形である。このように、その研究は止まることなく進展している。

同氏は、日本における学問分野としての地域研究の確立に心血を注ぐとともに、長らく教鞭をとった東京大学で多くの弟子を育てた後は、両国政府間の合意により2016年にハノイに設立された日越大学の学長として、ベトナムにおいても地域研究を定着させるべく奮闘を続けている。

以上のような、同氏のベトナムを中心とする東南アジア研究に対する先駆的かつ貴重な貢献に対して、選考委員会は大同生命地域研究賞の授与を決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2020年度
大同生命地域研究奨励賞

塩谷 哲史 氏

筑波大学人文社会系 准教授

略 歴

塩谷 哲史（しおや あきふみ）

1. 現 職：筑波大学人文社会系 准教授
2. 最 終 学 歴：東京大学大学院 人文社会系研究科 アジア文化研究専攻単位取得退学
(2010 年)
3. 主 要 職 歴：2008 年 日本学術振興会特別研究員 (DC2)
2009 年 筑波大学人文社会科学等支援室
2011 年 筑波大学人文社会系助教
2020 年 筑波大学人文社会系准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①塩谷哲史「19世紀中葉オレンブルグにおける交易について」今村薫編『牧畜社会の生態』名古屋学院大学総合研究所、2019年、17-27頁。
 - ②塩谷哲史『転流—アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史—』風響社、2019年。
 - ③塩谷哲史「19世紀コングラト朝ヒヴァ・ハン国の君主像」野田仁、小松久男編『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社、2019年、118-139頁。
 - ④Shioya, Akifumi. “The Treaty of Ghulja Reconsidered: Imperial Russian Diplomacy Toward Qing China in 1851,” *Journal of Eurasian Studies*, 10-2, 2019, pp. 147-158.
 - ⑤塩谷哲史「1842年ガージャール朝使節団のヒヴァ派遣—シーア派捕虜解放問題と英露両国の関与について—」『内陸アジア史研究』33、2018年、51-73頁。
 - ⑥塩谷哲史「中央アジア乾燥地域の都市と水資源—ヒヴァ—」『歴史と地理 地理の研究』196、2017年、66-73頁。
 - ⑦塩谷哲史「伊犁通商条約（1851年）の締結過程から見たロシア帝国の対清外交」『内陸アジア史研究』32、2017年、23-46頁。
 - ⑧塩谷哲史「ニコライ・コンスタンチノヴィチ大公のアムダリヤ転流計画—英露関係とトルクメン問題の文脈から—」『内陸アジア史研究』31、2016年、73-92頁。
 - ⑨Onuma, Takahiro, Yayoi Kawahara and Akifumi Shioya. “An Encounter between the Qing Dynasty and Khoqand in 1759- 1760: Central Asia in the Mid-Eighteenth Century,” *Frontiers of History in China*, 9-3, 2014, pp. 384-408.
 - ⑩Shioya, Akifumi. “Povorot and the Khanate of Khiva: a new canal and the birth of ethnic conflict in the Khorazmoasis, 1870s-1890s,” *Central Asian Survey*, 33-2, 2014, pp. 232-245.
 - ⑪塩谷哲史「ヒヴァ・ハン国と企業家—イチャン・カラ博物館の一勅令を手がかりに—」堀川徹、大江泰一郎、磯貝健一編『シャリーアとロシア帝国—近代中央ユーラシアの法と社会—』臨川書店、2014年、59-77頁。
 - ⑫塩谷哲史『中央アジア灌漑史序説—ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡—』

風響社、2014年。

- ⑬Shioya, Akifumi. “Who Should Manage the Water of the Amu-Darya?: Controversy over Irrigation Concessions between Russia and Khiva, 1913-1914,” Paolo Sartori ed., *Explorations in the Social History of Modern Central Asia (19th - Early 20th Century)*, Brill, 2013, pp. 111-136.
- ⑭塩谷哲史「ハンと企業家—ラウザーン荘の成立と終焉1913-1915—」『東洋史研究』71-3、2012年、58-84頁。
- ⑮塩谷哲史「帝政末期アムダリヤ流域の灌漑利権問題に関する一考察—ラウザーン荘設立をめぐるロシア＝ヒヴァ・ハン国関係の変遷、1913-1915年—」『メトロポリタン史学』8、2012年、107-129頁。

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2012年2月 博士(文学) (東京大学)

業績紹介

「中央アジアにおける水利と社会に関する歴史学的地域研究」に対して

塩谷哲史氏は中央アジアにおける水利と社会に関する歴史学的地域研究において顕著な業績をあげてきた、すぐれた研究者である。同氏は、中央アジア、とりわけウズベキスタンとトルクメニスタンの境界付近を通してアラル海に流れ込むアム川流域の灌漑について、ロシア語、トルコ語、テュルク諸語の史資料を駆使しながら歴史学的な観点から研究してきた。

その研究成果は、まず博士論文をもとに単著として出版した著書『中央アジア灌漑史序説——ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』（風響社、2014年）にまとめられた。また、一般向けのブックレット『転流——アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史』（ブックレット《アジアを学ぼう》52）風響社、2019年）としても刊行し、研究成果の社会への還元に関しても大きな貢献をしている。

さらに、共著として野田仁・小松久男編『近代中央ユーラシアの眺望』（山川出版社、2019年）、帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』（エリア・スタディーズ164、明石書店、2018年）、堀川徹・磯貝健一・大江泰一郎共編『シャリーアとロシア帝国—近代中央ユーラシアの法と社会』（臨川書店、2014年）、Paolo Sartori, ed. *Explorations in the Social History of Modern Central Asia, 19th-Early 20th Century*. (Brill's Inner Asian Library, Leiden: Brill, 2013)などに論考を寄稿している。

塩谷氏は、単独論文を多数執筆しているが、主要なものは上記の単著・共著を含む諸著作に所収されている。ここでは単著を中心に同氏の研究業績を紹介する。

『中央アジア灌漑史序説——ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』（風響社、2014年）は、松下アジアスカラシップ（現・松下幸之助国際スカラシップ）によるウズベキスタン共和国への留学中の研究成果に基づいて執筆され、東京大学大学院人文社会系研究科に提出された博士論文を出版したものである。同書は、16～20世紀初頭の中央アジアのホラズム・オアシスにおける灌漑史の展開と政権の興亡に焦点を当てそれらと自然環境の変化とのかかわりを視野に入れつつ、実証史学の立場から中央アジアの水資源問題を検討している。具体的には、ウズベキスタン共和国ホラズム州とトルクメニスタン共和国ダシュオグズ州の国境にあったラウザーン運河周辺で、19～20世紀にかけての120年あまりの間に起きた諸事件とその背景、歴史的重要性を、一次資

料を読み解きながら、従来の中央アジア近現代史ではあまり注目されてこなかった水利史、地方政権史、企業史の視点から明らかにしたものである。その過程で、17 世紀以降の中央アジア西部での移動を活発化させたトルクメン遊牧民の動向、20 世紀初頭に短期間集中的に見られたロシア人企業家による中央アジアにおける大規模灌漑事業への進出計画と並んで、アム川のカスピ海への転流計画にも言及されている。まさに、自然環境と地域社会のむすびつきをもとに、新たな歴史像を描いたものである。

『転流——アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史』（風響社、2019 年）は、ロシアが 500 年をかけて、中央アジアの政治・経済・文化など多面にわたる関係を構築した過程で追及してきた、アム川をカスピ海に転流させる課題を明らかにしたものである。アム川転流計画がアム川流域の大規模灌漑事業にどのような影響を与えてきたのか、干上がって半世紀で約 5 分の 1 に縮小した現代のアラル海問題とどういう関係があるのかという視点から、その歴史的展開を 500 年のタイムスパンの中で具体的に描いたものである。

以上、塩谷氏の中央アジア灌漑史に関する研究業績に関して、特に歴史的な観点からの地域研究への取り組みにおける実績を主に取り上げたが、その他、学会や研究プロジェクトの組織・運営といった学術活動の面でも、中央アジア地域研究の発展への貢献を見せている。日本中央アジア学会理事、またヨーロッパ中央アジア学会（ESCAS）理事（現・副会長）として第 16 回大会（2019 年 6 月、エクセター大学）を成功に導いた。さらに、筑波大学においては旧ソ連諸国出身の留学生に対して英語で研究指導・教育を行い、2014 年度には筑波大学若手教員奨励賞を受賞した。

以上のような塩谷哲史氏の研究実績や学術活動の実行力などを高く評価し、さらに中央アジア地域を対象とした地域研究の新たな展開を期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2020年度
大同生命地域研究奨励賞

鈴木 英明 氏

国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授

略 歴

鈴木 英明（すずき ひであき）

1. 現 職：国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授
2. 最 終 学 歴：東京大学大学院 博士後期課程アジア文化研究専攻西アジア歴史社会
専門分野博士後期課程修了（2010 年）
3. 主 要 職 歴：2012 年 日本学術振興会海外特別研究員
2014 年 長崎大学多文化社会学部准教授
2018 年 国立民族学博物館グローバル現象研究部助教
2020 年 国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①鈴木英明「アフリカを彩った日本製カンガの旅——『メイド・イン・ジャパン』から立ち上がるグローバル・ヒストリー」『中央公論』2020 年 7 月号。
 - ②鈴木英明「海域世界の鼓動に耳を澄ますー19 世紀インド洋西海域世界の季節性ー」『国立民族学博物館研究報告』44-4（2020）、591-623.
 - ③鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』明石書店、2019 年。
 - ④Hideaki Suzuki, “Kanga Made in Japan: The Flow from the Eastern to the Western End of the Indian Ocean World,” in Pedro Machado, Sarah Fee and Gwyn Campbell (eds.), *Textile Trades, Consumer Cultures, and the Material Worlds of the Indian Ocean: An Ocean of Cloth*, New York: Palgrave, 2018, 105-132.
 - ⑤鈴木英明「インド洋西海域と大西洋における奴隷制・交易廃絶の展開」、島田竜登編『1789 年——自由を求める時代』山川出版社、2018 年、229-272.
 - ⑥Hideaki Suzuki, “Agency of Littoral Society: Reconsidering Medieval Swahili Port Towns with Written Evidence,” *The Journal of Indian Ocean World Studies* 2, 73-86.
 - ⑦Hideaki Suzuki, *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the Nineteenth Century*, New York: Palgrave, 2017.
 - ⑧Hideaki Suzuki, “Distorted Variation: A Reconsideration of Slavery in Nineteenth-Century Swahili Society from the Master’s Perspective,” in Alice Bellagamba, Sandra E. Greene, and Martin A. Klein (eds.), *African Slaves, African Masters: Politics, Memories, Social Life*, Trenton and Asmara: Africa World Press, 2017, 221-236.
 - ⑨Hideaki Suzuki, “The ‘Banian’ in Port Town: A Case Study of the Kachchhi Bhatiya in Nineteenth-Century Zanzibar,” in Awet T. Weldemichael, Anthony A. Lee, and Edward A. Alpers (eds.), *Changing Horizons of African History*, Trenton and Asmara: Africa World Press, 2016, 149-172.

- ⑩鈴木英明「インド洋——海から新しい世界史は語りうるのか」、羽田正編『地域史と世界史』ミネルヴァ書房、2016年、78-96.
- ⑪鈴木英明「世界商品クローヴがもたらしたもの——19世紀ザンジバル島の商業・食料・人口移動」、石川博樹・小松かおり・藤本武編『食と農のアフリカ史——現代の基層に迫る』昭和堂、2016年、209-222.
- ⑫Hideaki Suzuki (ed.), *Abolition as A Global Experience*, Singapore: NUS Press, 2016.
- ⑬Hideaki Suzuki, “Enslaved Population and Indian Owners along the East African Coast: Exploring the Rigby Manumission List, 1860-1861,” *History in Africa: A Journal of Method* 39/1 (2012), 209-239.
- ⑭鈴木英明「19世紀ヌシ・ベ島で絡まり合う多様な関係性」飯田卓(編)『マダガスカル地域文化の動態』国立民族学博物館調査報告103、2012、241-258.
- ⑮鈴木英明「インド洋西海域と『近代』：奴隷の流通を事例にして」『史学雑誌』116/7(2007)、1-33.
- ⑯鈴木英明「カンバルー島の比定をめぐる新解釈」『オリエント』48/1(2005)、154-170.

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考：2010年 文学博士（東京大学）

業績紹介

「インド洋西海域世界における移動性の総合的・動態的研究」に対して

鈴木英明氏は、地域研究の分野にインド洋西海域世界という新たな領域を開拓し、歴史学を基礎として文化研究と社会研究を総合する重厚で精緻な実証研究を展開してきた。この新たな地域研究のユニットを創成するという挑戦的な試みに成功しただけでなく、以下に述べる独創的な成果をあげた点は、現代日本の地域研究に大きな貢献と刺激をもたらしたといえる。

従来の地域研究が対象としてきた領域は、主要には、陸地を対象にして設定され区分けされた地域ユニットであった。しかしながらこうした地域研究観では視野に入りにくい世界がある。それは、海を跨ぐヒト、モノ、情報、カネの流れ、それらの移動性のなかで積み上げられてきた人々の膨大な生の営みでありその軌跡としての歴史である。鈴木氏は、この世界に焦点を据え、その空間的な広がりをも動的に捉えることでインド洋西海域世界という新たな地域ユニットを提唱してきた。これは従来の陸を歴史叙述の中心に据えてきた歴史観（陸地中心史観）を単純に批判して、海を中心に据えた歴史観（海域中心史観）への移行を提唱しているのではない。むしろ、事物や価値意識の移動性そのものに注目するところから、社会によって恣意的に設定される地域の空間的、あるいは時間的な固定性に対して異議を申し立てることで、地域研究の脱中心化と相対化・流動化をはかろうとする野心的な試みだといえる。

鈴木氏が新たに開拓したインド洋西海域世界を対象とした新しい地域研究の、より具体的で独創的な成果は以下の3点にまとめられる。

第一は、インド洋西海域世界における奴隷交易研究の開拓である。大西洋と較べると、いまだにその全貌が明らかにされていないインド洋西海域の奴隷交易について、欧米はもとより、インド洋周辺の文書館での資料調査、そしてそこに現地でのフィールドワークを加味することで、この交易の最盛期であり、同時にそこに世界的な潮流としての奴隷交易廃絶運動が展開されていく19世紀を主たる対象として研究を行ってきた。とりわけ、奴隷交易者そのものに注目し、その実態だけでなく、彼らが奴隷交易廃絶活動に接するなかで、どのように自己を変容させていったのかという点について実証的に明らかにしたことは特筆すべき成果である。交易者は新たに導入される条約などの規制を逆手に取ったり、構築される包囲網をいわば飼いならしめることによって、自らの交易活動を継続させていった。こうした一連の攻防のなかで、船籍

やパスポートといった新たな海上移動の管理の仕組みが作りあげられていった。この知見を世界に発信したのが 2017 年刊行の英文著書である。奴隷交易者という具体的な対象からインド洋西海域世界の変容というマクロな事象を考察したこの著書は国内外の学界ですでに高い評価を得ている。

第二の意義は、海を跨いで移動するヒトやモノの実態解明を基礎として、従来支配的であったインド洋海域世界崩壊説を批判的に見直そうとする試みである。従来のインド洋海域史研究では、18 世紀半ばより西欧の政治経済的伸張によって、この地域世界の一体性が崩壊されたという理解に基づき研究が行われてきた。鈴木氏はそうした立場を西洋対東洋という不毛な二項対立に基づくものとして批判し、奴隷交易者やインド商人コミュニティーさらにはマングローブといった 19 世紀のインド洋西海域を跨ぐ具体的なヒトやモノの移動の実態を解明することで、崩壊ではなく、むしろ変化を伴う再編成という連続的側面を見出し、インド洋西海域世界の柔軟性と強靱性を明らかにした。

第三の成果は、インド洋西海域世界の設定にかかわる新しいモデルの提唱である。従来、海域を設定するうえで頻繁に用いられてきたネットワーク論について、開放性を謳いながら、実質的には対象空間を閉鎖するという海域研究の陥っていた難問を克服するために、鈴木氏は、移動する事物の流れの拡がりそのものから出発することでインド洋西海域世界へのアプローチを試みる。そのうえで、この世界を規定する季節風モンスーンと人間の諸活動とが調和することで生み出される季節性に着目し、それが連動・共鳴するリズムという視点からインド洋西海域世界を捉えようというのである。

鈴木氏は 13 か国における文献資料調査および 27 か国にも及ぶ現地調査によって、この地域世界に密着し、そこに生きる人々を観察し共感するなかで得た着想を歴史研究に応用する手法は、地域研究の新たなダイナミックな可能性を体現しているといえよう。

以上のように挑戦的で卓越した研究業績を重ねてきた鈴木氏が優れた研究能力を有していることは明らかであり、将来的にもこの新たな海域世界を対象とした地域研究の国際的牽引者となる研究者として期待できることから、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2 0 2 0 年度
大同生命地域研究奨励賞

南出 和余 氏

神戸女学院大学文学部英文学科 准教授

略 歴

南出 和余（みなみで かずよ）

1. 現 職：神戸女学院大学文学部英文学科 准教授
2. 最 終 学 歴：総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了（2007 年）
3. 主 要 職 歴：2007 年 京都大学地域研究統合情報センター 研究員
2008 年 日本学術振興会特別研究員 PD
2010 年 桃山学院大学国際教養学部 専任講師
2014 年 桃山学院大学国際教養学部 准教授
2019 年 神戸女学院大学文学部英文学科 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①*Millennial Generation in Bangladesh: Their Life Strategies, Movement, and Identity Politics*. [The University Press Limited, edit, 2020]
 - ②人類学者がフィールドに残すもの—バングラデシュ・ゴヒラ村の人々の記憶に生きる原忠彦教授. [『文化人類学』 85(2), 2020]
 - ③『子どもへの視角—新しい子ども社会研究』[新曜社, 元森絵里子・高橋靖幸との共編著, 2020]
 - ④バングラデシュ独立戦争の映画表象. [『桃山学院大学総合研究所紀要』 44(2):15-30, 2019]
 - ⑤『メディアの内と外を読み解く—大学におけるメディア教育実践』[せりか書房, 木島由晶との共編著, 2018]
 - ⑥Seeking New Life in Bangladesh: Do rural migrating youth ‘urbanize’ after moving to the city? [Nrvijnana Patrika (Journal of Anthropology) 23:11-26, 2018]
 - ⑦バングラデシュ海外出稼ぎ者の夢と葛藤—出稼ぎ先ギリシャと出身農村社会の狭間で. [『桃山学院大学総合研究所紀要』 43(1):55-71, 2017]
 - ⑧グローバルとローカルの狭間で錯綜する『子ども』のイメージと実態. [『子ども社会研究』 23:41-52, 2017]
 - ⑨『「学校化」に向かう南アジア—教育と社会変容』[昭和堂, 押川文子との共編著, 2016]
 - ⑩映像作品『教育第一世代—子ども期から若者期へ』（英語版：The First Educated Generation）[52 分 DV/HDV, 2016]
 - ⑪ The First Educated Generation as ‘Social Transformers’ in Rural Bangladesh: An Overview from their Childhood to Adolescence in a Village of Jamalpur. [Nrvijnana Patrika (Journal of Anthropology) 20:33-51, 2015]
 - ⑫『「子ども域」の人類学—バングラデシュ農村社会の子どもたち』[昭和堂, 2014]
 - ⑬経済成長下の若者の都市移動—「わたし語り」の人類学の試み. [『桃山学院大学総合研究所紀要』 39(3):91-108, 2014]
 - ⑭ヴェールを脱いでみたけれど—バングラデシュ開発と経済発展の中の女性たち.

〔福原裕二・吉村慎太郎編『現代アジアの女性たち—グローバル化社会を生きる』新水社, pp. 195-214, 2014年〕

⑮映像作品『シムルの夢と葛藤』（英語版：A Life Suspended）〔37 分 HDV, 2013〕

⑯『フィールドワークと映像実践—研究のためのビデオ撮影入門』〔ハーベスト社, 秋谷直矩との共著, 2013〕

⑰*Story of the Ghosts Living in Water*（水に棲むおばけの話—環境教育のための教材紙芝居）. 〔Rubi Enterprise, edit, 2012〕

⑱映像作品『バングラデシュ農村社会における割礼の変容』（英語版：Circumcision in Transition: in A Bangladeshi Village）〔35 分 DV, 2005〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2007 年 文学博士（総合研究大学院大学）

業績紹介

「バングラデシュにおける次世代から見た社会変動の研究」に対して

南出和余氏は、バングラデシュにおける現代の社会変動を、子ども期から若者期を生きる個人に対する継続した追跡調査から捉え、かつその調査に映像を活用してきた。子ども社会への参与観察やその後の追跡による実況調査、それらを長期にわたって映像で記録し続けてきた実証研究には、他に例を見ない高い独創性が見受けられる。

同氏の研究の原点は、大学院生時代に取り組んだバングラデシュ農村部における「子ども」を対象にした人類学研究にある。村の子どもたちに密着した調査を通じて、規範が共有されるべき大人像が明確な社会では、子どもたちは厳しく監督されて成長するというよりもむしろ放任され、子ども同士の遊びや気儘に過ごす時間を通じて自らを社会化していくことを発見し、それを「子ども域」と概念化して考察した。この博士号請求論文は、その独創性が評価され、総合研究大学院大学の優秀博士論文に授与される長倉研究奨励賞を受賞した。その後、この研究を基に出版された『「子ども域」の人類学—バングラデシュ農村社会の子どもたち』（2014年、昭和堂）には、日本南アジア学会および日本子ども社会学会の両学会から学会賞が与えられ、地域研究的にも地域を超えたテーマ研究としても高く評価された。

同氏が調査を開始した2000年代初頭のバングラデシュ北部農村部は、都市部や海外への労働移動が増加し、農村部にも初等教育が急速に普及するなど、流動性の高い社会への転換点にあった。子どもたちの中には、学歴を求めて私立学校に通う子どももあれば、10代の早い時期からダッカの縫製工場、さらにヨーロッパなどに出稼ぎに出る若者も出現しており、こうした多様化する子どもたちの未来を考える上でも、子どもたちを当事者とする自律的な領域の発見は重要である。

南出氏はその後、バングラデシュの経済・政治にも関心を深め、青年期を迎えた子どもたちの成長を通じて、地域社会の変容を彼らの内在的視点から考察する研究を開拓している。また、バングラデシュ農村の一事例に止めることなく、共同研究へと発展させ、南アジアを対象とする他の国内研究者と共に「南アジアにおける教育と社会変容」の文脈で議論し、『「学校化」する南アジア』（押川文子共編著、2016年、昭和堂）として発表している。さらに近年は、国際的なバングラデシュ研究ネットワーク

への参与を積極的に進め、現地バングラデシュの人類学者ら数名と国際共同研究を組織し、現在の若者世代がバングラデシュの急激な社会変動を象徴する存在であると位置づけ、より多角的に議論した編著” Millennial Generation in Bangladesh” が現地出版社からまもなく出版される予定である。

また、個人を対象とする研究方法を模索するなかで、映像記録の積極的な活用と作品化を実践してきたことは、南出氏の研究における重要な特色の一つである。同氏の映像作品は、制作者の作家性を強調する作品制作というよりも、子ども期という短い時間の記録を残し、長期にわたって調査する側とされる側のコミュニケーションを図るためのツール、すなわち映像人類学としての映像記録である。例えば男児割礼を題材に、当事者である男児自身、家族、村の人々の感想や表情を丹念にとらえた作品『割礼の変容』は国際的にも評価され、エストニアで開催された第 20 回 Parnu International Documentary and Anthropology Film Festival (2006 年) にて最優秀科学ドキュメンタリー賞を受賞した。その後の作品でも、バングラデシュの村からギリシャに出稼ぎに行った青年と村に残された家族を繋ぐ映像（『シムルの夢と葛藤』2013 年）や、数名の子ども期から若者期の 12 年間を継続的に反復記録した映像（『教育第一世代』2016 年）など、常に、そこに映る当事者たちが映像を鏡として自己の姿を制作者と共に確認する方法が取られており、それぞれ国際映画祭や国際学会で上映されている。

現在、南出氏は、学部教育に重点をおく私立大学で教育活動に従事しており、自らのバングラデシュとの研究を通じた関わりや映像制作を、高等教育の現場において実践・体系化することに、意欲的に取り組んでいる。過去に類を見ない勢いでグローバル化がさまざまな形で人類社会に直接的な影響をもたらす現在、人類学・地域研究教育の社会的需要はこれまで以上に増している。研究を教育に生かす方法を模索し、それを教育実践研究として提示する南出氏の姿勢は、地域研究の発展においても重要である。

以上の理由から、南出和余氏には今後さらなる活躍が大いに期待され、選考委員会は大同生命地域研究奨励賞の授与を決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2020年度
大同生命地域研究特別賞

該当者なし

以上